ポルノ

『赫い髪の女』

林　久登　スタッフ

１９７９年　日活　７３分
監督　神代辰巳
原作　中上健次
脚本　荒井晴彦
出演　宮下順子、亜湖、石橋蓮司、阿藤快

牛でもないのにミルクを出して、ゴムでもないのに伸び縮み

神代辰己の最高傑作というだけでなく日活ロマンポルノが生んだ映画史上に残ると言われる作品。冴えないダンプの運ちゃん（石橋蓮司）が、道端で赤毛の女（宮下順子）を拾う。向こう見ずな男に性愛の世界を知り尽くした女との出会い、男は次第に女のペースにのめり込んでいく。延々と男と女のからみが続く。

この映画の見どころは、ダンプの運ちゃんが仲間に自分の女を廻し、ヤケ酒を飲んでいるところだろう。そこへキャッチバーの女（山口美也子）が現れ、男を誘う。脚本は気鋭の荒井晴彦。その一部を紹介しよう。

（月刊シナリオ１９７９・３より）

女「さ、何してんの、２階行こ」
男「わしは酒飲みに来たんじゃ」
女「何、気取っとんのや、ドスケベが、たっとるやんか」
男「おまえとやりとてたっとるんやないで、わしの女が男とやっとんじゃ、それ思て口惜しゅうてたっとんじゃ」
女「アホ、たっとる〇〇〇に分別あるか、〇〇〇やったら見境なしや、手で擦ってもいきよる」男のチャックを開け、屹立しているものをひき出し
女「今実験したる」と、掌に唾を吐き、股間に擦り付けると男にまたがる
女「自分の女売って酒喰らって、いい気なもんじゃ」激しく腰を揺すりたてる
男「お前じゃ　いかんのじゃ」
女「（キッとなる）よし、いかしたる」　再び男を揉みしだく
男「オッ　ウッ」男と女、果てながら椅子から転がる
女「（荒い息つき）いったやないか、男なんか同じや、見境なしや」

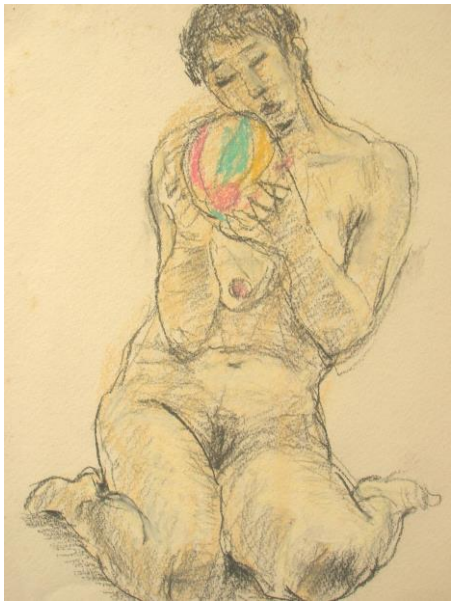
女の強さと、男の生理のやるせなさを生々しく描いて圧巻。山口美也子の体当たりの演技もすごいが、この脚本の迫力は他の追随を許さない。すでにピンク映画のスターだった宮下順子は、退廃的なムードで淫らな赤い髪の女を好演している。

神代は映画を撮りながら徹底的に遊んでいる。女がいない時、男は退屈しのぎに、女の置いていった口紅を使って、自分の〇〇〇に落書きをしている。一人で唄とも独白ともつかぬ声を出して、「牛でもないのに、ミルクを出して・・・ゴムでもないのに、伸び縮み・・・・」とか、彼は何処でこんな猥歌を探してくるのだろう。勿論、シナリオにはない。彼の遊びは、性愛の世界に繋がっている。

神代はポルノ映画の申し子のような存在で、性愛を通して人間が描ける稀有な監督だったと言えるだろう

日活のロマンポルノ路線を牽引した神代も、晩年は肺をやられ苦しむ。それでも酸素ボンベを背に車椅子で、遺作となった『棒の哀しみ』（１９９４、主演奥田瑛二、永島映子）を撮っている。病でガリガリになった姿でメガホンをとる姿は、痛々しさと同時に鬼気迫るものがあった。翌年享年６５歳という若さで亡くなる。

神代に心酔する奥田瑛二は、葬儀に参列し彼の骨を拾って帰ると、それをかじって酒を飲んだという。彼の志を引き継ぎ、２００１年『少女』を初監督としてメガフォンを取り話題になる。



２００３年三重フェスは、四日市文化会館と共催で映画会を行い、藤田敏八監督作品『八月の濡れた砂』と出演作品『ツイゴイネルワイゼン』の上映、そして敏八作品で役者デビューした奥田と『ツイゴイネルワイゼン』で敏八と共演した大谷直子をゲストに迎え開催した。その夜『少女』を同じホールで上映するつもりだったが、会館よりポルノ作品ということで、待ったがかかり、やむを得ず切り離して、近くの映画館「スピカ」で上映したことがある。皮肉にも大盛況であった。